

## 夕陽に染まる

放射朗

懺悔のつもりで書きます。私の名前は沢渡亮子。

某女子大の剣道部に所属しています。

女子大の剣道部なんていったら、お嬢様みたいな娘たちがキャーキャー言いながら、遊び半分合コン目当てで半分で、適当にやっつてるんだと思われる方が多いでしょうが、うちの大学の剣道部はちょっと違って、かなりの硬派でした。

練習もきつかったし、先輩には絶対服従の軍隊みたいな規律の厳しいクラブでした。

そのせいかどうか男っぽい性格の部員が多く、性欲もみんな強かったみたいです。性欲の発散は、個人的なレベルで解消している子もいましたが、なんと言っても月に一回くらいやる通称逆レイプでみんな発散していました。

逆レイプというのは想像するもたやすいと思いますが、適当な男の子をナンパして連れてきて、集団で無理やりセックスさせてしまうことです。

男の子も最初は大喜びですが、一度や二度の射精で終わらせてもらえないとわかってくると、不安になってきます。

もう無理だよというのを大勢で押さえつけて、口を使ったり手を使ったり、あらゆる方法で勃起させ、セックスを強要するのです。最初は威勢のよかった子も六回くらいで顔がゆがんで泣きが入り、十回を越えるるとどんな子も本当に泣き出して許しを請うようになりました。そこまで散々男の子をいたぶって、私達はストレス解消をしていたのです。

私も最初にこのクラブの実態を知らされたときはクラブを止める決心をしたけど、先輩たちのリンチが怖かったし、あと少し我慢すれば下級生が入ってきて楽になる

からなどと言われてずるずるとやめるタイミングを逃してしまっただけです。ここまですんなり背景で、ここからが本題というところだけです。

私には隆志という四歳違いの弟が一人います。

私が大学の二回生のころ、弟は高校に入ったばかりのまだ童顔の結構な美少年でした。

性格も素直で屈託がない弟を私はずいぶんかわいがっていたと思います。もちろん普通の意味です。

あまり喧嘩もしたことがなかった私たちですが、ある日ちょっとしたいざこざがありました。

実は私たちのクラブではちょっとした決まりがあります。

それは対外試合のとき負けた子はあそこの毛（つまり陰毛）を剃っていかないといけない、というものでした。

負け試合の次の日、きれいに剃毛した下半身を部員全員の前からささないといけません。

その屈辱をばねに練習に励むということでしょうが、いくら練習しても強い人はいくらでもいるわけですから、どの子も二ヶ月に一度は剃毛する羽目になっていました。

その規則は二回生までで、三回生以上は免除だったから、結局は上級生の暇つぶし、サディスティックな欲求解消に利用していただけなんですよ。

私はその日対外試合で負けて、風呂場で泣く泣く結構濃い目の陰毛をお父さんの髭剃りでそり落としました。

自分でよく見えない部分ですから後ろの方を剃るときは冷や汗ものでした。肛門の周りの毛も一本残らず剃り落とすのにゆうに三分はかかってしまいました。

「姉ちゃんまだはいつてんの？ いいかげんあがつてよ」

弟がいきなり引き戸を開けて顔を突き出しました。

私達はさっきも書いたように仲の良い姉弟で、小学生のころから一緒にお風呂に入ってたくらいです。

もうそろそろ弟も思春期だからやめなきゃねと思っている、いいはずら心でお互いの裸を覗き合ったりしていました。

だからその時も、弟は何の気なしに引き戸を開けて見たんだと思います。そうしたらいつも見慣れている姉のあそこはつんつるてんになっていた。

「なにそれ、毛を剃ったんだ、つるつるでいやらしい」

弟は吹き出すのをこらえて私のあそこを指差しました。

「ちよつと、じろじろ見ないでよいやらしいのはそつちでしょ、お母さんに言ったら許さないからね」

この事がもし両親に知れたら、いろいろ聞き出されて絶対クラブを止めさせられます。でも簡単に止めさせてくれるようなクラブじゃありません。いくらクラブの内情は言っていないと言っても、よつてたかってリンチに合うのは目に見えています。

二ヶ月前に退部届を出した裕子のことを一瞬思い出しました。

彼女に与えられたリンチは悲惨なもので、男でもここまでしないだろうというくらいのものでした。

最後は裸で四つんばいにされて特大のパイプをお尻の穴に突き入れられていました。彼女の太腿に流れた真っ赤な鮮血が、今でも目に焼き付いています。そんな悲惨な目に合いたくないばかりに、つい弟に対してきつい言い方をしてしまったのです。

「何だよ、許さないってどうすんのさ」

いつになくきつい姉に反発して隆志が言い返してきました。

「あんたのここもつるつるにしてやるから。もっともそうしても今とあんまり変わらないけどね」

言ってしまった後ですぐに後悔しました。

体型は普通に発育しているけど、まだあそこはうっすらと生える程度で、自分でも気にしているのを知っていたからです。

弟は顔を真っ赤にすると、

「そうかよ！そんな時もお父さんの髭剃り使っわけね」

そう言っつて隆志は引き戸を強く閉めて去っていきました。

お父さん！と隆志の叫ぶ声がして、私はこれで終わったと確信しました。

最後に冷水を浴びて気持ちを落ち着けて、覚悟を決めてお風呂から上がりました。

父に呼ばれることを覚悟していたけど、髪をふきながら目の前を通る私に父はなにも言いませんでした。

母も特に変わったところはありません。

「切り札は最後に取っておくもんだからね」

ドライヤーで髪を乾かしていたら隆志が部屋に入ってきて言いました。

隆志は両親には言いつけていなかったんです。今のところ……。私はドライヤーを落としそうになるくらい力が抜けました。

「最後つてどういうこと、変なこというわね、脅すつもり？」

「脅すなんて人聞きの悪いこと言うなって。姉さんより俺の方が少だけ立場が上になったつてことじゃない」

弟はなんだかつきつきして言いました。

さつき私にひどいこと言われたことは、もう気にしてないのかしら……。

それともどうやって仕返ししようか考えて楽しんでいるのか。どっちなのかそのとき私にはわかりませんでした。

それから数日後の事でした。

剣道部の部室で着替えていると、奥のほうで三回生の先輩が数人で話している声が聞こえてきました。

「伝説の雅美先輩の話、知ってる？実はあたし今まで聞いたことなかったんだけど、こないだ兄貴の友達からうわさを聞いたんだよ」

三回生の浜口先輩の声でした。

「かすかに聞いたことあるけど、確か十年くらい前の部長だよね」

別の先輩の声が答えました。

「かすかにつて、どんな話？」  
浜口先輩が聞き返します。

「かなりきつい先輩で、逆レイプの行事始めたのも雅美先輩が最初だったとか言っただけど……」

「まあそんなことはみんな知ってることだよ。年に二回の合宿のときに男の子ナンパしてきてみんな一滴残らず絞り取ってしまうというのはね」

思わせぶりに浜口先輩は口を閉じました。

「なによ、それ以上すごいことしたの、雅美先輩」

ほかの先輩達が、ぐっと浜口先輩の話に興味を示し出しました。

私もつい聞き耳を立ててしまいました。

「最初の被害者、つまり逆レイプのね、その男、実はうちのクラブの部員を強姦したんだって、それもかなりの常習者で、ほかのところではその男にやられた女が自殺騒ぎまで起こしたって言うのよ。

でもその男、有力者の息子とかで、全部示談で済ましてたんだって」

「それで雅美先輩が頭に来て仕返ししてやったってこと？ 正義の味方じゃん」

「ただの逆レイプじゃなくて、その男、最後は去勢までされたって話よ。そこまでやるかあ、て感じよね」

どうやら浜口先輩はそれが言いたかったようでした。

「嘘だあ。そこまでやったら傷害罪で警察沙汰になるわよ」

「それに去勢って玉抜きすることですよ、どうやってやるのよ道具だつてないし」

「きちんと去勢手術するなんてできるわけじゃない。竹刀で叩き潰したって話。おっそろしいわよね。そいつ今ごろ新宿二丁目でおカマやってんのかしら、あはは……」

「そう言えば最近逆レイプやってないよね。今度は一回生に捕まえさせようか。あ、佐渡、ちょっとおいで」

話していた先輩が私に気づき、私は呼ばれました。

「そろそろまたストレス解消したいんだけど、次の獲物は一回生に捕まえさせようと思うのよ。あなたの担当の翔子と百合子に捕まえてくるように言いなさい。今回は年下の美少年系ね。みんなもそれで良いよね」

後の方はそこにいた三回生に向かって、浜口先輩が言いました。

「賛成。若い子をいたぶるのってすごく感じるもんね」

「私は好き者のサラリーマンを泣かせるのが面白いけど、今回はそれで良いわよ」

結局私はいやな役を言い付けました。

一回生に見つけて来いと言っても、まだなれてない子がすんなり見つけることができるとも思えません。

失敗すると私の責任になるのですから。

その日のクラブが終わって、翔子と百合子を呼び出しました。

そして先輩から言われたいやな役を果たしました。

二人ともすっかり怖気づいてしり込みするだろうと思っていましたが、意外な答えが返ってきました。

「私、美少年系なら一人心当たりがあります。弟の友達なんですけど、一度家に遊びに来たんです」

百合子が言いました。

「へえ、どんな感じの子」

翔子が横から聞きました。

「今流行の藤原竜也にちょっと似た感じだけど、私はあの子のほうがいいと思うね」

嫌な予感がしました。

私の弟がちょうどそんな感じだからです。

「その子、山王高校の剣道部なんです。私がこの剣道部だって言ったら、一度練習を見たいなんて言っていたから。連れてくるのも簡単だと思います」

山王高校の剣道部と聞いて私はその子が弟だと確信しました。

でも、だったら私のことはなぜ黙っていたのかしら……。

私はここで別の子を探すようにいふべきだったのです。

弟をこんな女達の性欲の毒牙にかけるなんて、絶対に阻むべきだったのです。

でも、私は先日からの弟とのいざこざでちょっと意地悪な気分になっていました。弟の泣き叫んでる顔がちょっと見てみたいなんて思いました。ひどい姉ですね。

私は一呼吸おいて、言いました。

「あなた達に任せるわ。三日後の日曜日ね」

私は弟がすんなり毒牙にかかりそうになっても、言い聞かせてやめさせる自信はありません。

言い訳になるかもしれないけど、だからあえて百合子たちの計画をやめさせることをしなかつたんです。

二日後の夜。

私は弟の部屋に行きました。

「何。こんな時間にどうしたの」

ノックすると弟がドアを開けて言いました。もう十一時をだいぶ回っているのだから無理ありません。

「ひよつとして、明日私の大学の剣道部に見学に来る、なんてないよね」

やっぱり私は切り出しました。

「なんで知ってるの。びっくりさせようと思ったのに。友達のおさんから誘われたんだ。男子とも手合わせしてみたいけど、大学生ではレベルが違いすぎるから俺と練習試合してみたいって」

やはり百合子の言っていたのは弟の隆志のことだったのです。

「だめよ。来ちゃだめ」

私はちよっと強く言いすぎたのかもしれない。

「何でだめなのさ。姉ちゃんには関係ないだろ」

隆志はやっぱり反抗的になってしまいました。

なんだか私はいつも同じ失敗をしてるみたいです。

情けなくなっていました。

「だから、怪我するかもしれないし。女だと言っても大学生はきつ

い打ちこみするんだから」

逆効果とわかっていても、こんなことしか言えなかったんです。

「冗談じゃないや、せいぜい三年くらいしか違わないのに女に負けるもんか。せつかく見学させてくれるって言うのに、邪魔しないで

よね。あの事言いつけるからね」

隆志は切り札を切ってきました。

「でも、もちろんその友達も来るのよね」

私はできるだけ柔らかい物言いをしよう気をつけて言いました。

「まあね。勇介も来るよ。それなら安心？」

私はちよっと胸をなでおろしました。

今まで何人も男を逆レイプの餌食にしてきたけど、同時に二人に対してすることは無かったからです。

ひよっとしたら、百合子の誘い方が下手で、うまく行かなかったのかもしれない。もし失敗したとしたら、私の責任になるわけですが、それならそれでもいいと思いました。

次の日の練習が始まる前に、増田先輩がみんなの前で言いました。「今日かわいいゲストを二人呼んでます。みんなの励みになるかもしれないし、自信無くすかもしれないけど、小松勇介君と、沢渡隆志君です」

増田先輩に紹介されて、道場に二人の少年が入ってきました。

面以外の防具をきちんと着た二人の少年はとてりりしく、すぐに周りから歓声が上がりました。

「かわいい。君達いくつ？」

後ろの方からそんな声が聞こえました。

「二人とも山王高校の一年生です。小松君は百合子の弟。沢渡君は亮子の弟さんです。今日は剣道の稽古に来たんだからあまり変なこと教えないようにね」

増田先輩が代わりに答えました。

どうやら増田先輩は全部わかってるようです。

弟を逆レイプされるんじゃないかとひやひやしていましたが、何とか無事に済みそうです。

素振りや簡単な稽古をみんなでした後、いよいよ練習試合をする  
ことになりました。

「それじゃあ小松君と試合してみたい人、手を上げて」

増田先輩の声に大勢の子が手を上げました。

しかし増田先輩は手を上げていない百合子を指名しました。

「最初は姉弟対決見てみたいよね。百合子、弟に負けないようが  
んばりなさい」

百合子は突然の指名にちよつと戸惑ったようでしたが、すぐに面  
をつけて、弟の勇介君に向かい合いました。

「始め！」

増田先輩の声で、二人は間合いを取り始めました。

百合子はちよくちよく打ちこみますが、勇介君はそれを楽にはら  
いながら、打ちこみやすい間合いを計ってるようでした。どう見て  
も勇介君のほうが上手のようです。勇介君はまだ一本も打ちこみま  
せんがその力量は一目瞭然でした。

やっぱり三才下とは言え男子の運動神経は想像以上に優れてるん  
だと思いました。百合子は何度も打ち込みますが、かすりもしませ  
ん。

「勇介君、姉さんに遠慮しなくてもいいから、本気出さないさい。  
弟に負けたからと言って百合子を責めることはしないから」

遠慮勝ちな勇介君に増田先輩がいました。  
とたんに勇介君の打ちこみが始まりました。

空を切る鋭い打ちこみが百合子の面、胴、小手、と鮮やかに決ま  
りました。

「一本。それまで。さすがに男子は強いね。まあ、百合子が弱すぎ  
るだけだね。聖子、練習してもらいなさい」

次は二回生の星取聖子さんが指名されました。

彼女は二回生の中では三本指に入る強豪です。もちろん私なんか  
相手になりません。試合は両者共に決定打が出ず引き分けに終わ  
りました。

「聖子さんが苦戦するんだから、百合子が負けるのはしょうがない  
よね」

横の方でそんな声がしました。

「じゃあ勇介君は休んで。次に沢渡隆志君どうぞ」

いよいよ弟の出番です。当然私も指名されると思って、面をつけ  
ました。

予想通り私と弟の対決になりました。

さっきの百合子は一回生だからまだ言い訳できるけど、二回生の  
私が高一の弟に惨敗じゃあ一回生たちに対しても面目丸つぶれです。

私はいつにもまして気合を入れました。

「お姉ちゃん。本気出すからね」

隆志が私にだけ聞こえる小声で言いました。

この前のし返しに後輩達の前で恥かかせてやろうと思っていたの  
かもしれません。私は弟がちょっと憎たらしく思えました。

弟のために私がどれほど心配していることが……。それをちっともわかってないんだから。

隆志は試合が始まると同時に鋭い打ちこみを入れ始めました。

私は防戦一方。正直言って弟がこれほど上達してるとは思いませ  
んでした。反撃しようと打ちこんでも、力強く跳ね返されて、鋭い  
面を受けてしまいました。

「惜しい。今のはちょっと浅かったよ。亮子、二回生なんだからあ  
んまり無様な負け方はしないでよね」

さつき勇介君と試合をした聖子の声でした。

「先輩のいじわるー。亮子先輩にプレッシャーがかかりますよう」

一回生の声も聞こえました。

そんな周りの声にあせった私が一歩踏み込んで面を打とうとした  
ときに、隆志の小手が入りました。

私は思わず竹刀を落としてしまいました。

「一本。それまで。姉弟対決は二組とも弟の勝ちみたいね。亮子ま  
だまだだね。隆志君、まだ疲れてない？」

増田先輩が言いました。

「はい。まだ大丈夫です。もっと強い人と試合がしてみたいです」

隆志は私のことなど眼中に無いみたいに言いました。  
やっぱりこの間のことを根に持ってたのでしょうか。

隆志はその後二回生の安達さんと、北川さんにも勝ちました。

「隆志君なかなかやるわね。私もちょっとお手合わせ願おうかな」

増田先輩が言いました。増田先輩は三回生の中でも別格でとても  
隆志のこなう相手ではありません。

私は出来れば止めさせたかったけど、適当な理由もないし、強い  
相手と戦いたいと言ったのは隆志の方だし、出かかった言葉をぐっ  
とこらえました。

「あんまりいじめないようね」

他の三回生から増田先輩に向けて声がかげられました。

両者が向き合って、構えました。隆志はいつも中段で、増田先  
輩は下段に構えています。

隆志は果敢に攻め始めました。

怖いもの知らずの打ち込みですが、やはり年下とはいええ男子の打  
ち込みは激しく、増田先輩も防戦一方でした。激しく打ち合う竹

刀の音が道場に響き渡ります。

隆志の胸が増田先輩をほんの少しかすりしました。増田先輩の実力  
なら隆志なんかにかすらせもしない筈だし、簡単に勝てるはずなの  
に、手抜きして試合を楽しんでるみたいでした。

一瞬打ち合いが止まると、今度は増田先輩が攻め始めました。

シュツシュツという空気を裂く音が増田先輩の打ち込みの早さを示していました。隆志はその一撃一撃を男子の体力で跳ね返そうとしていますが、

どうにもスピードが違いすぎるようです。

小手が入ったかと思うと、強烈な面が隆志を襲いました。

それでもぐらつく体を立て直して、隆志が突きを繰り返します。

本当なら『一本それまで』で試合は終了の場面でしたが、隆志がさらに攻撃に移ったことも合って、誰も止めませんでした。

隆志の突きを軽くかわした増田先輩はさらに強烈な面を入れました。ここで隆志の体がぐらりと来て、崩れるように倒れてしまいました。一度は持ちこたえたものの、二度目の面で失神してしまったのでした。

「隆志君があんまり強いんで本気出しちゃった。ごめんね亮子。由美子、隆志君を更衣室で休ませてあげて。一人じゃ無理かな。一回生三人ほど手伝ってね」

増田先輩はそう言ったけど、私は素直に受け取れませんでした。

彼女の實力なら隆志を失神させるのもさせないのも手加減ひとつ、自由なはずです。

それなのにあって失神するほど打ち込んだのは……………。

何か考えがあるんじゃないかと思いました。

「私も手伝います」

私はそう言って立ち上がりましたが、増田先輩に止められました。

「亮子はその前にすることがあるわ。さっきのあのざまは何？ 百合子はまだこれから鍛え上げるところだけど、あなたは一年間ここで鍛えてあげたのに、ちょっと情けなかったわね。あなただけは居残りで素振り千回。他の人は練習終了。勇介君もご苦労様でした。隆志君はもう少し休んでから亮子と帰るだろうから、先に帰ってね」

増田先輩の言葉で、疑問に思っていたことが氷解しました。

それはまさしく私の背中を凍りつかせる答えでした。

やっぱり増田先輩は隆志を狙ってるんだ。そのためにわざと隆志を失神させたんだと思います。勇介君と別々にするために。

周りのみんなは更衣室に引き上げていきます。勇介君は別室に着替えに行きました。

「何してるの。早く素振り始めなさい」

増田先輩の命令には逆らえませんでした。

いくら弟が心配でも、先輩の命令には絶対服従と叩き込まれてるんです。それにまだ隆志が餌食にされると決まったわけじゃないし、今のところ私の想像でしかないんだから……………。

私はできるだけ早く済ませるために懸命に素振りを始めました。

そのころ隆志はまだ更衣室で気を失ったままだったようです。

後から隆志に聞いた話では、周りのざわめきに気がついてみると大勢の部員達が着替えの真つ最中で、自分は下着だけにされて部屋の真中の長椅子に寝かされていたそうです。

最初わけがわからずにいるたえるだけの隆志に由美子先輩が近づいて言いました。

「あら、思ったよりお早いお目覚めね。増田先輩と試合して失神したのは憶えてる？」

由美子はショーツ一枚でブラジャーもつけていなかった。

「は、はい。すいません、すぐ出ます」

あまりのことに隆志は急いで起き上がるつもりだったが由美子に止められた。

「まあまあ、急におきるのは体によくはないわ。もう少し寝てなさい。私達のことは気にしないで。見たかったら見ていいし、見なくなったら目をつぶっていてね」

由美子に肩を押されて、隆志は長椅子に押し付けられた。

その時すでに硬直していた隆志のペニス由美子は一瞬ぎゅっと握った。

「さすがに若いわね。今すぐにも食べてしまいたいくらい」

「真つ赤になってるかわいい」

「あそこはびんびんでも純情なんだよね」

「ほら、お姉さんのおっぱい見て見て」

周囲の冷やかしの言葉は次第に過激になっていった。

「由美子先輩。この子で本当にあれやるんですか。さすがに亮子先輩の弟さんじゃ、まずいんじゃないですか」

百合子が聞いた。

もともとそのつもりで百合子は隆志に目をつけたのだが、亮子の弟と知ってびっくりしていた。

「まさか。あんな手荒なことできるわけじゃない。本当は稽古だけの予定だったんだけど……。増田先輩がいたく気に入っちゃったらしいのよ。この子」

そうしているうちに大方の部員達は着替えを済ませていた。

ショーツ一枚の由美子と下着姿の隆志を除いて。

「一回生は帰っていいわよ」

増田は入ってくるなり言った。

「じゃあね。また遊びにおいでね」

増田先輩にかわいがってもらいなさいね」

口々に言いながら一回生たちは出て行った。

二回生もほとんどいなくなり、更衣室には五人が残った。

「君、まだ童貞でしょ」

おどおどしてどうしていいか分からなくなっていた隆志にいきなり増田久美が言った。

「え、そそれは」

起き上がった隆志の隣に久美が腰掛けた。

そして右手をやさしく隆志の腰に回した。

「止めてください」

隆志は立ち上がろうとしたが、両側から部員達に押さえつけられて、立つことができなかった。

「初めてで恥ずかしいことは分かるわ。でもすごく気持ちいいこと教えてあげるわよ。亮子なら大丈夫。三分は素振りにかかるから」  
久美は後ろから回した手を下着の中にいれ、隆志の硬直した物を直に握った。男の子のもっとも敏感な部分を刺激されて、隆志はすぐにでもいきそうになった。

久美の手はさらに下がって、隆志の睾丸を優しくもみ始める。

こんな気持ちいいことされたのは初めてだ。

隆志は男女の性の喜びを始めて知らされた。

隆志が抵抗しないことを見極めると、久美は隆志のトランクスを脱がせにかかった。他の部員達はシャツを脱がせる。

すぐに隆志は全裸にされた。そして長椅子に寝かせられた。

「すごくきれいよ。無駄な肉もなくて、男の一番きれいな時期よね。

高校生くらいって」

久美はそう言いながら隆志の滑らかな肌を手のひらでなでた。

小さく硬くなっている隆志の乳首に顔を近づけキスをした。

隆志は生まれて初めての快感にうっとりなってしまうた。

そして女の子のように甘い声をあげ始めた。

「隆志君感じてるわね。あそこからよだれが垂れてるわ」

由美子たちは久美と隆志の様子を客観的に観察していた。よほどのことがない以上手を出さないように言われているのだろう。

「いつもの増田先輩とは大違いよね。あんなにやさしく男の子をかわいがることもできるのね」

後ろの方で二回生たちが小声でささやきあっていた。

あつ、隆志が小さく叫んだ。久美が隆志のペニスを口に含んで愛撫し始めたのだった。久美の口が隆志のペニスを口に含み、舌がねっとりペニスの先にまとわりつく。発射寸前だった隆志にとつととも我慢できるわけがなかった。何の前触れもなく口に含んだペニスから白濁液が発射されて、その勢いに久美は少しむせた。

しかし、久美は当然のようにそのすべてを飲み干した。

「おいしい。やっぱり若い子のは新鮮って感じね」

久美は妖艶な笑みを浮かべた。

隆志は一度射精して、ふと我に返った思いだった。悪魔のような久美の笑みは隆志には恐怖心すら抱かせた。自分のまったく知らなかった世界に、いきなり放り込まれて頭まで沈められた気持ちだった。

「いい子ね。今度はお姉さんのお腹に出してね」

隆志を椅子に寝かせると、久美は服を脱ぎ始めた。すぐに全裸になった久美は、隆志の上にまたがる。それまでの短い時間に、由美子たちの手で隆志は再び勃起させられていた。

「ほつら、ここが女の子の一番大事なところよ。亮子のと比べてみてどう？」

久美は隆志の顔の上に腰を持っていき、股間を自分から広げて見せた。

「うわあ、止める」

隆志は叫んで下から両手で久美のお尻を上突き上げた。

咄嗟のことにさすがの久美も長椅子から転げ落ち、ロッカーでたたか頭を打ってしまった。

隆志は起き上がると、押さえようとする部員達を押しつけて出口に走った。が、もう少しというところで、何かにつまづいて転んでしまった。

久美の投げた竹刀だった。

「いたた、失礼な少年ね。亮子のしつけがなっていないんだわ。代わりに私達でしつけをしながら言うか」

久美は怒りを押さえながら言った。

「私達も手伝っていいんですね。しつけの」

由美子が嬉しそうに言う。

「もちろんよ、女性に乱暴を振るう男の子はまず女の怖さを教えてやりましょう」

「何言ってるんだ。あんた達は変態だ」

隆志も負けじと言い返す。

「私達に変態ならあなたのお姉さんも変態よ」

久美の言葉に隆志はぐっと詰まった。まさか姉さんがこの女達と同じようなことをしてるなんて信じたくなかった。

女達はすぐに竹刀を手にしてかまえた。隆志は素手のままだ。

「ほつらどこに打ち込んでほしいかな」

由美子が竹刀の先を不気味に揺らしながら隆志に近づく。

隆志が由美子の懐に飛び込んで由美子の竹刀を奪おうとしたとたん、横にいた二回生市子の竹刀が隆志の尻に打ち込まれた。

激痛に思わずしゃがむ隆志は久美に蹴られ、仰向けに倒れた。

直後に二発目の蹴りが隆志の股間を襲った。ぎゃっと叫んで激痛に気が遠くなりかける。隆志の両足はそれぞれ別々の部員に押さえ込まれた。

冷たい床の感触が背中に感じられた。

上半身は胸に座り込んだ由美子の重みで身動き取れなくなった。

「おとなしくしていれば気持ちいいことたっぷり教えてあげたのに、こうなってしまったてはしょうがないわね。まだ残ってる二回生全員連れておいで。それから亮子も連れておいで」

久美が手の空いている部員に命じた。

私はもう少しで素振り千回が終わるかという時に、山崎先輩に更衣室に連れて行かれました。

その時はまだそこで起きている出来事を知らなかったから、更衣室の中の状態を見てとても驚きました。長椅子に全裸の隆志が寝かされ、両手両足は椅子の支柱に縛られていたのです。

「姉さん、助けて」

隆志が叫びました。

私はすぐにそばによって紐を解こうとしましたが、由美子先輩と同級生の岡崎市子の竹刀で阻まれました。

腰と肩にきつい一撃を受けて、その場にしゃがみこんでしまいました。

「誰が助けていって言った。あんたのしつけがなくなってないから私達が代わりにしつけをしてやるうってんだ。あんたは横で見ればいいんだよ」

由美子先輩の言葉はまるでスケ番のようでした。

かわいい獲物をやっと自由にできるからか、由美子先輩達はすでに興奮状態みたいでした。そうしてる間にまた部員達が入ってきてきました。

まだ残っていた二回生と一回生があわせて八人いました。

すでにそこにいた人たちと合わせて十二人、それに私と隆志。

それだけの人数が集まったので、十二畳ある広めのロッカールームも狭くなり、女の臭いでむんむんになってしまいました。

「さて、かわいい美少年の童貞を奪うのは誰にしましょうか。じゃんけんで決めるといふのもなんだしね」

増田先輩は楽しくてしょうがなさそうに言っています。

「私にやらせてください。一度童貞を犯してみたかったです」

一回生の京子が勢いよく手を上げました。

増田先輩は一瞬躊躇して決心したように言いました。

「いいこと思いついたわ。かわいい弟の童貞はお姉さんに奪ってもらいましょう。今日の秘密を守るためにも我ながら名案だわ」

増田先輩の言葉に私は背筋がぞつとする恐怖を覚えました。

「亮子聞いたわね。全部脱いでこっちに来なさい」

有無を言わせぬ口調で増田先輩は言いました。

「い、いやです。私にはできません」

勇気を振り絞って私は言いました。膝ががくがく震えていました。

「先輩に逆らう気？ どうなっても知らないよ」

横で由美子先輩が言いました。

「ぎゃあー」

そのとき上がった悲鳴は隆志の悲鳴でした。

見ると増田先輩の右手は隆志の股間をがっしり握っていました。

隆志は睾丸をきつく握られ、苦悶の表情をしています。

「この子がどうなってもいいの。亮子だっぺこうなることくらい想像できたはずでしょ。百合子が目をつけたのは自分の弟で、弟がここに来ることになったら、最悪の場合はどうなるのか。それを止めることだっぺあなたにはできた筈。そうしなかつた以上、この

責任は半分はあなたにあるのよ。そして今日の秘密を守るためにはこうするしかない。自分でまいた種なんだから、自分で刈りなさい」

増田先輩の言うことは一理あると思いました。考えてみれば確かに私が悪かったんです。

私は観念して剣道着と下着をすべて脱ぎました。

「姉さんだめだ。そんな奴の言うこと聞いちゃあ」

まだ鞞丸の痛みが続いているのでしよう。隆志はかすれ声で懸命に言いました。

「ごめんね隆志。姉さんが全部悪いのよ」

私はやっとそれだけ言いました。そして寝ている隆志の体をまたぎました。

「おお。近親相姦は初めて見るわ」

「亮子も本当は隆志君とやりたかったのよ」

そんな言葉が私の心にぐさぐさ突き刺さりました。

隆志は必死で勃起しないように我慢していました。

でも増田先輩や由美子先輩の歴戦のテクニクの前では空しい努力と言ったものでした。

「ほら、立ったよ。ぶすつと一気にいきな」

由美子先輩が弟のペニスを私に握らせました。弟のそれは熱く脈打っていました。今まで何度も逆レイプを経験してきた私ですが、

さすがに手が震えました。弟はそれでも何とか戒めを解こうと力いっぱい紐を引いていました。

隆志の先端を私の入り口に押し当てます。

「毛がないからもろ見えだね」

「何だかんだ言って亮子ずぶ濡れじゃん」

そんな周りの声にもすでに無感情になっていました。

人はいろんな罪を犯して罰を受ける。

私は今、これまでしてきた事の罰を受けているのか、それともこの罪をまた別の罰で償わないといけないのか……。

そんなとりとめもないことを考えながら、私は弟のペニスの上に腰を沈めました。

私の体の中心に弟の熱い体突き刺さりました。

そのときの弟の表情はわかりません。見る勇気がなくて私はきつく目をつぶっていたからです。一生残る傷を弟に負わせている、そう思いながらもみだらに腰をくねらせていました。

弟はすぐにも行きそうなくらい感じていました。じゃあ私の方はというと、恥ずかしいくらいに頭の中は真っ白になって、これまでしてきたセックスが色あせて見えるくらいに感じてしまっていました。私は周りの状況も何もかも忘れてしまつて快感に身を任せてしまいました。

セックスの本当の快感の前には現実の状況なんて霧やかすみほどの実体も無いものだと思いました。

髪を振り乱し、一匹のメスになって腰を振りました。

両脇を抱えられて、弟から離されたとき、私はまだ弟のペニスにすがりつこうとしていました。

「おっと、そろそろ隆志君がいきそつだから、離れなさい。妊娠なんかしたらさすがにまずいからね」

増田先輩の声に我に返ってみると、ちょうど隆志が増田先輩の手の中で射精している所でした。

隆志の体は弓なりに反り返り、二度二度と勢い良く真っ白いミルクを噴出していました。

「良くやったよ。亮子。立派に弟を男にしたね。その記念写真はこの中になんか入ってるから。安心しな」

由美子先輩はデジタルカメラを持って薄笑いしていました。きつく目を閉じていたので、フラッシュの光もまったく気づかなかったのです。

隆志を見ると、ぐったりと力が抜けた様子で目じりから一筋の涙が光っていました。

「さて、亮子は横にどいてな。これから恒例の逆レイプ大会始めます」

由美子先輩の号令で一回生たちが隆志に群がりだしました。

「止めてください。隆志を許してください」

私は増田先輩の前に土下座をしてお願いました。

「もう遅いよ。十人以上の飢えた狼の前に餌ぶら下げたんだ。ここで止めたら暴動が起きるよ」

こんな時だというのに、増田先輩はふざけていました。

どんなにお願いしても聞き入れてもらえないと分かって、私は実力行使を決心しました。隆志に群がっている一回生たちを突き飛ばして離れさせました。

「何すんのよ！ 自分ばかりいい気持ちになって。あたし達のチンポ横取りする気？」

逆レイプの被害者は女達にとって、人間とは思ってもらえないのです。

彼らはただの性器。

勃起することだけが仕事のおもちゃ扱いなのです。

私はたちまちのうちに数人の部員から押さえつけられ、両手両足を一括りに縛られてしまいました。その上興奮した一回生たちにお尻を何度も竹刀でぶたれました。

「このやろう、今まで先輩面しやがって、これまでのお返しいきつい一撃を加えるその声は私の担当した一回生の翔子でした。

長椅子に縛られた隆志の股間では百合子の顔が上下していました。隆志のペニスは百合子の口の中にすべて咥え込まれていました。

隆志は快感よりも苦悶の表情でした。私が来る前にすでに一度射精させられていた事は後で聞きました。

「高校一年といえやりたい盛りだからね。まだ後十回はがんばってもらうよ」

由美子先輩が言いました。

「止める、変態」

半泣きの隆志が叫んでいます。

「私達が変態なら君だって。実のお姉さんにまたがってもらって随分気持ちよさそうだったけど」

翔子はそう言いながら全裸になって隆志の顔をまたぎました。

「ほら、口で私を気持ちよくしなさい」

彼女は隆志の顔を見下ろしながら、股間を隆志の口に押し付けました。

「歯を立てたら承知しないからね、玉を二つともつぶしてやるよ」

一回生の翔子は隆志に噛まれることをちょっと恐れていたのですよ。

事前に釘を刺すことを忘れませんでした。

「ふつぶ、その調子。やればできるじゃない」

翔子は気持ちよさそうに隆志の顔に体重を預けていました。

隆志が彼女のお尻の下でどんなことをさせられているのか。

見えませんが、私は痛いほど感じました。

想像すらしたことのない屈辱の中で、睾丸をつぶされる恐怖から無理やり女のあそこを舐めさせられているんです。隆志の心は今

たずたに引き裂かれてるんだと思いました。でも、考えてみれば、私自身が今までに何人もの隆志くらいの年齢の男の子たちをずたずたに引き裂いてきたのです。

罰されるべきなのは私の方なのに、隆志は何も悪いことはしていないのに、不条理とはこういうことでしょうか。

「元気になりました。次ぎどうぞ」

隆志のペニスを口で愛撫していた百合子が上級生のほうを向いて言いました。逆レイプのときの役割分担は決まっています、一回生は最初は射精して萎えたペニスを愛撫して立たせるのが仕事です。

そして一回生が立たせたペニスに上級生がまたがり、満足するまでむさぼるのです。上級生が散々した後、まだ男の子の余力が残っている場合はやっ

と一回生に回ってくるのですが、ほとんどの場合上級生に犯しまくられた男の子たちはそこですでにギブアップ状態でした。

だから一回生が気のすむまでまたがれるのは新入生歓迎の逆レイプ大会のときだけです。

「それじゃあ、私がいただきます。まったく。おとなしくしてれば私だけで終わってたのに……」

増田先輩はちょっと気の毒そうな顔をして、隆志の腰の上にまたがりました。隆志のペニスが増田先輩の豊かに陰毛の生えた股間に消えていくのが見えました。増田先輩は腰をゆっくりと回すようにしながら上下にゆすり始めました。

隆志はというと、苦悶の表情から無表情に変わっていました。あきらめたように。

放心したように。

「大きさは小さめだけど、その分こっちに動く余地があるから、これはこれでなかなかいいわね。ほら、隆志君のお口が退屈そうよ。誰か舐めさせてあげなさい」

「京子いきます」

一回生の京子がすぐさま下着を脱いで隆志の顔にまたがりました。「ほら、さっきみたいに私も気持ちよくしてね。サボったら玉はじきだからね」

隆志は二人の女に顔と腰にまたがられ、苦しそうに身をくねらせていました。縛られた隆志の手足が、無駄とわかっていても紐を力いっぱい引っ張っています。縛られてる個所にはうっすらと血がにじんでいました。

隆志は3回目を、ピルを飲んでいるらしい増田先輩の体内に放出しました。

再び勃起させるために一回生たちが群がりました。

「そろそろお尻を攻撃しないと立たないみたいですよ」

翔子が由美子先輩に言いました。

「そうね、たっぷりかわいがってあげなさい。急ぐ必要もないからね、時間は充分あるから」

男の子は三〜四回射精するとペニスをいくら刺激しても勃起しなくなりします。そういうときに効果的なのが、お尻から指を入れて前立腺を刺激する前立腺マッサージです。

これをやると特に若い子は絶対勃起していました。

隆志は肛門にクリームを塗られ、指を挿入されたみたいでした。

「やめてくれ。いやだ」

顔にまたがった京子が腰をずらした隙に隆志の声がしました。

でもその声はすぐに京子のお尻にかき消されました。

長い時間がたっている。自分がやる立場だったときには時間のことなど考えもしませんでした。隆志の苦悩を見せ付けられて、私はやっと苦しみを受ける立場のつらさを実感しました。

恐ろしい女たちだと思いました。

自分たちの欲望のために思いやりも優しさも捨てて、男を完全に物体としか見ていないのですから。でもついこの間まで、この自分がその恐ろしい女の一人だったんです。

さらに何度目かの射精を果たして、隆志は叫びました。

「やめてください。もうやめて、許してください」

私は過酷な状況が続くのに疲れ果て無感情でその様子を見ているだけでした。

「お願いモードに入ってきたね」

増田先輩はそんな隆志を見下ろして言いました。

逆レイプされる男の子は最初は喜んで私たちに体を預けます。

その状態を『快樂モード』と呼んでいました。

そして続けてセックスしていくうちに、いいかげんにしろと悪態をつく『悪態モード』に入ります。

そのあたりからが逆レイプの本番です。

そのうち、頼むからやめてくださいと、それまでと言葉遣いが変わる『お願いモード』に入り、最後に本当に涙を流して泣き叫ぶ、『泣きモード』になっていきます。

私たちは泣きモードに入ったらあと三回くらいと計算してました。

お願いモードはまだまだあと五回は搾り取れる段階だと考えていたんです。

男の子にとっては自分の意思に反して無理やり何度も射精させられることは過酷な拷問です。精神的にはもちろん、肉体的にも、さまざま消耗をもたらすのです。

逆レイプの被害者は例外なく一人では起きれないくらいにぼろぼろにされています。最初は大喜びでいた男の子たちが次第に表情を変えて、苦痛から苦悶へそして泣き叫び、終いにはぼろぼろに壊されていく。

その過程を観察するのが私たちにとって最高のストレス解消の余興だったのです。でも自分の最愛の弟が目の前で壊されていくのを見て、今更ながら自分のしてきた罪の深さを思い知らされたのでした。

「もう少しよ。あと一回いったらお開きにしてあげるから、がんばってね」

増田先輩が私の方を横目で見ながらいいました。

その言葉が嘘なのは私にはわかっています。

最後の方になると、男の子も立ちが悪くなるため、奮起させるためにあと一回とか言っただけなんです。あと一回。それが終わると、あと一人、最後にもう一人。などと言っただけで引き延ばしていくんです。

そうでもしないとせいぜい3時間くらいの間に行くら若いとはいえ十回以上も射精したりできるわけがありません。

男の子達はそんな風にじらされていくうちにお問い合わせから絶望して泣きモードに変わってしまいました。

私は今までその様子を何度も見てストレス解消をしてきたんです。二十代のサラリーマンの男なんかは最初の方は、

「おい、もっと舌使えよ」

なんて偉そうに指図していたのに、最後の方になると、涙流しながら

「お願いだから許してください」  
なんて変化していくのを見るのは本当に愉快でした。

隆志はその後、紐を解かれました。

隆志はやっと長い拷問が終わったと、ほっとしたでしょう。

でもそれで終わりではありませんでした。

私は予想していましたが、最後に男の子たちのお尻を犯す行事があるんです。女たちがペニスの形をした張り型を股間に装着して、男の子たちのお尻の処女を奪うのです。それまでの間に散々肛門を愛撫されているから、本物のペニス並のサイズがある張り型を挿入してもめつたに出血することはありませんでしたし、男の子たちも痛がることはあまりありませんでした。

ただ、これをやられると、ほとんどの場合被害者はオカマになっ  
てしまうと言われていました。

女の喜びを知らされると言われていました。

隆志は腹ばいにされ、お尻を高く上げる格好に固定されました。

「最後に隆志君に女の喜びを教えてあげるわ。今日は私たちのために随分がんばってくれたからね」

由美子先輩が張り型を装着して言いました。

隆志はこれから何が始まるのか理解していない様子で、きょとんとしていました。でも、張り型の先が自分の肛門に密着して気づいたようです。

「お願いです。やめてください。お尻は許してください」

隆志は泣き叫んでいました。

「本当だったらまだあと3回は搾り取ってるんだけど、これでも情けをかけてるんだから」

増田先輩が言います。

「お尻の力を抜いて、大きく口を開けていたほうがいいわよ、その方が痛くないから」

由美子先輩も散々隆志を翹って満足していたのか、口調が優しくなっていました。それでもこれから隆志が犯されることには変わりはありませんが。

由美子先輩は隆志のお尻の力が抜けるのを待って、腰をぐいっと入れました。

「うぐっ」

隆志は上に逃げようとしたましたが、大勢の部員に抑えられてそれもままなりません。

「ほらいい子ね。半分入ったわよ」

由美子先輩は一呼吸おいて、さらに深く入れました。

「ああー」

隆志の声はまるで処女を喪失する女の子のようでした。

張り型はついにすべて隆志の中に挿入されてしまいました。でも隆志は痛がる様子はありません。

ちょうど男が女の子をバックから犯すように由美子先輩は腰をくねらせながら隆志を犯し始めました。

うっ、と隆志のうめき声が聞こえました。

粘膜をこすりあげるような無気味な音が聞こえ始めました。

そして隆志の荒い息遣いも。

「また元気よくなってきましたよ」

翔子が指摘したように隆志のペニスには心なしか持ち上がりかけていました。

私は見たくなかったけど、見てしまいました。

「この調子ならまだ満足してない子達にもさせてあげられたかもね、でも今日はこれでお開きにしましょう。隆志君、お疲れ様。今は恨んでるでしょうけど、一週間もしたらまたして欲しくなるわよ。そのときは遠慮なく遊びに来なさいね、今度は私一人で優しくお相手してあげるから」

増田先輩のその言葉で、長かった隆志の逆レイプが終わりました。私にはすごく長く感じられたけど、実際には3時間くらいでいつもよりも一時間以上早かったのです。

隆志はその間に八回いかされてぐったりしています。

多い子では十二、十三回いかされるので、いつもより手加減してくれたのは事実なのでした。部員たちがすべて更衣室を出て行き、私と隆志だけになりました。私の戒めも、隆志のも解かれています。部室の窓から夕陽の照り返しが射ってきて部屋の中は真っ赤に染まっています。

隆志は長椅子に腹ばいで寝ていました。

体力を使い切って静かに息をしていました。

隆志の背中から腰にかけての稜線が赤く染まっています。

すごく美しいと思いました。

隆志は無色だったのに今日この部屋で大勢の女たちに真っ赤に染められたんだと思いました。

人間は最初は無色でもいつかはいろんな色に染まっていくものです。

隆志だけじゃなく、私もこの剣道部でいつのまにか真っ赤に染まっていたんだと思います。

私は、いつまでも、息をする隆志の赤い背中の中の線を見つめています。

ゆっくりと上下する隆志の赤い線を。

窓の外で、沈み行く太陽が山の背に隠れて、周囲が深い赤の世界から、何も無い暗黒の闇に変わってしまうまで……。

夕陽に染まる  
完